実践提案 1

一年生の授業開き 言葉を学ぶ楽しさを

軽井沢風越学園
甲斐利恵子（かいりえこ）

はじめに

初めての国語教室。子どもたちの心には希望がぎっしりつまっている。不安でしかたないけど、やっぱり希望でいっぱい。中学校には怖い先生がいるらしい。難しいことばかりでついていけるだろうか。

そんな思いで、ドキドキ、わくわくしている子どもたちに第一回目に伝えることは、「大丈夫ですよ。」という雰囲気。最初にビシッと決めるのも一つの方法だが、「怖さ」で言葉の力が付くことはめったにない。学びたくてたまらない、このときの子どもたちに必要なのは何より安心感。そして、明確な課題と達成感。小さなことでいい。一つ一つの明確な指示を出すこと。しかもその指示は挑戦したくなるもの。楽しい雰囲気は大事だが、心地よい緊張感と共にある楽しさが大事。希望に満ちた子どもたちの心に学びへの決意が生まれますように。

指導計画（全六時間）

一時間目
- ようこそ○○中学へ「国語教室心得」
- 声で味わう「朝のリレー」谷川俊太郎
- 学習の記録を書こう（ノートの書き方）
- ※すべての時間で最後に行う

二時間目
- 「言葉に出会うために」
- 「野原はうたう」詩の朗読発表会
- コメントの発表について（声を届ける）

三時間目
- 「書き留める」
  学習の記録について（友達のノート）
- 自分のノートと友達のノート（自己評価に挑戦）
- 言葉を調べる（辞書早引き大会①）

四時間目
- 辞書早引き大会②
- 「言葉の小劇場」についての説明
  ～言葉は使ってこそ

五時間目
- 学習記録の発表
- 自主学習について（「続けてみよう」）
- 「言葉の小劇場」～どの言葉に挑戦する？

六時間目
- 「言葉の小劇場」～友達の作品
- 作品発表
- コメントの発表
- 「シンシュン」予告
- 一時間目から六時間目を振り返る

指導の工夫・授業の実践

一時間目は授業開き。まず「国語教室心得」。中学校での心構えである。「心得」という言葉の意味を押さえてキリッとした口調で読む。みんなで読んでみるのもいい。

次に、「朝のリレー」の群読。簡単な台本を示しながらクラスで心を一つにして読ませる。

【国語教室心得】
- ▼一時間一時間の授業の大切さを自覚する。
- ▼どんな言葉にも鋭く反応できる人になる。
- ▼多くの情報を受け取り、「学び」の材料を見つける。
- ▼すぐに辞書を引く。
- ▼面倒くさいという心に克つ。（克己心）
- ▼読書すること、考えることに励む。

それも言葉の力になるのです。

【朗読台本】（冒頭部分）

全員　きっぱり　男1　ゆっくり
朝のリレー　　谷川俊太郎
女1（問）　さわやかに
カムチャツカの若者が
男1　はっきり　女1　夢を想像しながら
きりんの夢を　　見ているとき

「学習の記録を書こう」では、次のような指示を出す。

【ノートの指導】（ゆっくり、はっきり）
- ▼教科書18ページを開いてください。
- ▼指示通りに動いてください。一回しか言いません。一人でやってください。では、始めます。
- ▼ノートを開いてください。
- ▼定規を使って線を二本引きます。
- ▼一本目の線は日付の欄。引いてください。
- ▼二本目の線を引きます。どうぞ。
- ▼教科書と同じような線が二本引けましたか。
- ▼では、いちばん上の欄に今日の日付と曜日を書きます。どうぞ。
- ▼二段目の欄の一行目に「国語教室心得」と書いてください。
- ▼次の行に「朝のリレー」と書きます。

一回の指示でどのくらい動けるか、どの子がつまずいているか。失敗しても笑顔で対応。最後に今日の授業のまとめを書いて終了。ノート回収。

二時間目は、詩を選んで朗読を聞き合う。友達の朗読に対してコメントの練習。コメントには「間の取り方」「心情」「風景」「声の大きさ」「作者」「聞き手」「表現」など国語科ならではの語彙を使うよう指示。「声を届ける」のQRコードを読み取って視聴するのもよい。

三時間目は、他者の学びを知り、自分を振り返る観点を意識できるようにする。一時間目や二時間目の友達のノートを印刷して紹介し、自分のノートに対する自己評価の練習をするのも効果的である。「他者から学ぶ」ことのスタートである。

四時間目は、百字程度の「言葉の小劇場」の説明。言葉は使ってこそ力が付くということの意識化を図りたい。（詳細は『国語教育相談室』85号「生きた場面の中で言葉に出会う」参照）

五時間目は、「言葉の小劇場」に挑戦。「シンシュン」の中から言葉を抽出したものを提示。一つ選んで書いて提出させる。次に、これからずっと続けてほしい自主学習について。教科書20ページの「続けてみよう」に触れる。

六時間目は、友達の作品を読み合って楽しむ。「シンシュン」を読む力にもつながる。そしてこの六時間分の振り返り。中学校国語教室への決意を語る時間である。「声」「伝える」「読む」「記録」「言葉」「友達」「自己評価」などの言葉を使って発表させたい。

実践提案 2

情報整理の「観点」を意識させる指導
「リクエストに応えて説明しよう」

一年P32「情報整理のレッスン 比較・分類」、P34「情報を整理して書こう」

福井大学
教育学部准教授
萩中奈穂美（はぎなかなおみ）

適切に情報を整理する「観点」の設定

この実践のキーワードは「観点」。情報を目の前にしたときの「目の付け所」「切り取り方」である。比較、分類、順序付けといった情報整理のスキルは「観点」が提示されればさほど難しいことではない。しかし、実生活では自分で観点を設定して整理することになる。観点は、何でもいいというわけではない。目的や相手や説明する事柄の特性に合った「適切な」観点であることが重要である。

本稿では、「情報整理のレッスン　比較・分類」（以下「レッスン」）で、観点を思いつく力を含めた情報整理のスキルを学び、そこで習得した知識・技能を「情報を整理して書こう」の中で「リクエストに応えて説明しよう」という言語活動として展開しながら、確かな力に結び付けていく実践を紹介する。

「レッスン」の扱い方の工夫

「レッスン」の「【整理の方法❷】分類する」では、「学校図書館への要望」アンケート結果を三つに分類している。分類すること自体も大切だが、これはどんな観点による分類か、この観点で分類するよさは何かを問いかける。また、他にはどんな観点で分類できるかを問いかければ、「実行性」「要望の多さ」等の観点が挙がるかもしれない。

下段の「問題」の扱いも工夫したい。場面状況→雑多な情報→観点設定→情報の整理の順に進めるとすれば、場面状況には「問題2」を活用して観点を着想させ、「問題1」の情報を整理するという扱いもあり得る。その際、なぜその観点が重要かを交流するようにする。

このように「レッスン」では、情報の機械的な整理にとどまらず、誰が何のために整理するのか、整理しようしているのは、どのような（量や質）情報かなどによって、情報整理（取捨選択も含む）の観点が決まることに気づかせる学習を行う。

リクエストに応えて説明しよう

■学習目標

・適切な観点を設けて情報を整理する。
・目的に応じてわかりやすい説明文を書く。

■指導計画（全五時間）

第一時　学習のめあてと流れをつかむ。説明してほしいことをリクエストし合う。

第二時　情報を収集し、目的や相手に合わせて情報を整理する。（自ら観点を設定）

第三時　情報を整理した結果（表やベン図等）をもとに、ペアで評価、助言し合う。

第四時　構成を考え、説明文を書く。

第五時　文章を読み合い、学習を振り返る。

■指導のポイント

本単元の中でも「情報の整理」に関する指導のポイントを四点示す。

その1　必然性のある言語活動にする

第一時では、級友の得意分野を知り合うという実際的な意義を言語活動に加えて導入とする。座席表などに級友に説明してもらいたいことを自由に書かせる。その人自身の人物紹介ではなく、その人がよく知っていて「説明」できそうな題材（所属する部活動、趣味、出身小学校、よく聴く音楽、学習のしかた等）にする。教師はこれを集約し、題材のボリュームや内容的価値を判断する。その上で、「君にはこういうリクエストがあったよ」と一人一題材を提示する。配慮としてリクエスト主もその数も明かさず、教師がリクエストするケースがあってもよい。

このように自分が紹介したいことではなく、相手が知りたいことを説明するような仕掛けにするのは、「説明」の本質が「問い」に答えることであるためで、最後に説明を読み合う必然性が生まれる。リクエストに応える書き手も意欲をもちやすい言語活動である。またこうした仕掛けによって、相手はその対象の何について知りたいかを想定しながら情報を収集することや、適切な観点を設定して情報を整理することにも本気で取り組むことができるだろう。

その2　情報は取「捨」選択する

第二時の情報の収集は、各自で行う。ここで言う情報には、自分がもともともっている知識（曖昧な場合は確認が必要なことも指導する）だけではなく、インターネットや書籍等から新たに得た情報が含まれるが、収集よりも整理に重点を置くために、本実践では前者を中心とした。情報を整理するには一定量の情報が揃っていなければならず、説明の題材に、当人がよく知っている事柄を取り上げるのはそのためでもある。細かな情報も一つにつき一枚の付箋に書き出し、それらを表やベン図等で整理していく。このとき大切なのが整理の「観点」で、次時での交流の中心にしたい。

さて、観点を設けて整理していくと不要な情報があることにも気づく。ところが、生徒はこの「捨てる」思考操作が苦手である。捨てるほど多くの情報を準備できないことや集めたものは全部使うべきだと思い込んでいることが原因だと考えられる。しかし、明解な文章には扱う情報の精選が不可欠である。「選ぶ」とは一方で「捨てる」ことである。それでも捨てることに抵抗があれば、「念のために取っておく」コーナーを作って移動させるとよい。情報過多の社会を生きていく上で必要な力として、この機会に、情報の必要性や確かさを基準に情報を取捨選択することを指導したい。なお、情報の収集・整理はタブレット端末を用いれば次時の交流もしやすくなる。

その3　情報整理の「観点」を問い合う

第三時では、ペアで整理した結果を見ながら助言し合う。この際「どういう観点で整理したの?」「なぜその観点なの?」といった問いかけ、「読み手としては○○が知りたいからこういう観点で整理してはどうか」といった助言をするように指導したい。また、全体に広めたい整理のしかたについては、積極的に共有することも効果的である。

その4　情報整理の力を次につなげる

第五時での学びのまとめも、「情報の整理」に焦点化して行う。その際には、説明文を書く学習に「レッスン」でどのような学びを活用できたかを意識させることが大切である。また、「学習を広げる」の「情報整理の方法」（一年P271）を案内して、今後どのような表現場面で身に付けた力が生かせそうか考えさせたい。

実践提案 3

読むことを書くことに生かす指導「文章の特徴を捉えてリライトに生かそう」

二年 P42「クマゼミ増加の原因を探る」

滋賀大学教育学部
附属中学校
井上哲志（いのうえてつじ）

はじめに

説明的文章の指導にあたっては、筆者の述べ進め方を手本にしながら作文するという学習活動のゴールを設定することに取り組んでいる。学習指導要領の「読むこと」と「書くこと」の指導事項を見比べると、共通することも多く、生徒が読むことで得た知識を書くことに生かすことで、互いを高め合うことができるのではないかと考えるからだ。

本教材は、仮説を立て、それを検証する形で本論が述べ進められている。他にも、小見出しが付けられたり、図やグラフがふんだんに使われたりするなど、目を引く特徴が多く、また、完成度が高いので、生徒が書く活動に取り組む際の手本となり得る。そこで、文章を読み、学んだことを生かして、話題や内容が似ているものの、異なる趣旨で書かれた文章をリライトする活動を課したいと考えた。リライトする文章としては、「フシダカバチの秘密」（アンリ・ファーブル作・吉田晴男訳、光村図書『国語1』昭和62年度版）を用いた。

指導計画（全七時間）

■学習目標

・情報と情報との関係のさまざまな表し方を理解し使う。

・観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考える。

■展開

第一次　文章の内容を理解する（五時間）

第一時　学習の見通しを持つ・本文の概略を捉える。

第二時　「フシダカバチの秘密」を読み、「クマゼミ増加の原因を探る」を比較する。

第三時　「クマゼミ増加の原因を探る」の工夫や特徴に注目し、リライトの「手引き」や「ひな形」を作る目的で本文を読む。

第二次　文章をリライトする（二時間）

第六時　「前提」「仮説1」「仮説2」の項目を立て、「フシダカバチの秘密」をもとに、リライトする。

第七時　友達の作品との相違点に注目し、その意図を確認し合う。

指導の工夫・学習の実際

▼第一時　「自覚的な学び」のために、仮説・検証型の文章を書くときに、今までの国語の学習で役立ったことや、困ったことを振り返り、交流させた。また、「困ったこと」をもとに、本単元における学習テーマを各自に立てさせた。

本文を読む前には、滋賀県においてもクマゼミが増加している原因を予想させた。本文の主張を自分事として捉えるためには、クマゼミ増加の原因を、「地球温暖化」と一言で片付けてしまいがちな自分たちの姿を、確認しておかなければならないと考えたからだ。

▼第二時　まず、「クマゼミ増加の原因を探る」と「フシダカバチの秘密」の、二つの文章を読み比べて、相手意識と目的意識の違いが、構成や叙述にどう影響しているのかを読み取らせた。同時に、生徒には中学校二年生を相手とし、フシダカバチの「秘密」を論理的に説明するという目的でリライトすることを確認した。

▼第三時～第四時　第二時で確認したように、「秘密」を論理的に説明するという目的をもってリライトするなら、「クマゼミ増加の原因を探る」から、筆者の述べ進め方の工夫のうち、何を役立てられそうか、意見交流をしながら「前提」「小見出し」「仮説（と検証）」に絞った。そのうえで、それぞれの部分を書くときに役立つ「手引き」（もしくは「ひな形」）を作る目的で、該当部分を分析的に読んだ。

「前提」は「前提を示した理由」を考えさせ、交流することで迫った。この場合、実際には検証の結果、否定され、本文にも書かれなかった、たくさんの「仮説」があったであろうことを想像させながら、「前提」には、事実に基づく合理的な判断の結果、仮説が立てられていることを読者に示す働きがあることを確認する。

生徒の作ったひな形

○○という事実は、△△と考えられるため、□□について調べるとよい。

「小見出し」を抜いた本文を配布し、「その段落の中心となる話題を示す名詞で終わる」という条件で書かせた。しかし、リライトの「手引き」を作成するために大事なのは、正しく小見出しを付けることではなく、小見出しと文章全体の関係を捉えさせることにある。この場合は、小見出しは全て、筆者の考える「クマゼミ増加の原因」であることを捉えた。

生徒の作った手引き

・中心となる話題に関連付けて付ける。
・名詞で終わるとよい。

▼第五時　まず、本文の「仮説1」と「仮説2」に注目し、共通点を探らせた。学級で共有したいことは、実験結果（事実）と考察（意見）で構成されていることである。次に、「仮説1」と「仮説2」の考察部分の相違点を探らせた。相違点をふまえて、接続語に注目しながら「ひな形」を作り、学級で交流した。

生徒の作ったひな形

［仮説1］Aの結果はBである。つまり、Cだと言える。
［仮説2］AについてBと言えるが、ただ、Cを考えるとDとは言えない

▼第六～七時　「前提」は、本文から引用して使えそうなところ、「仮説」は、自分で立ててみたものを、それぞれ交流させるなど、生徒のつまずきを予想しながら全体指導に取り組んだ。リライト活動に取り組み始めてからの個別指導は、手引きと本文を再確認させるように言葉がけをした。作品の交流では、根拠の過不足や、事例をどのくらい詳細に書くかなどについて、本文に立ち返って確認する姿が見られた。

おわりに

本校では、総合的な学習の時間に「BIWAKO TIME」という、課題探究学習に取り組んでいる。異年齢集団によるグループ学習だが、生徒は個人の学びをレポートにまとめる。リライトの教材として、卒業生の書いたレポートを使うなどすると、より、学びが実際の生活場面に密着したものになるだろうと思われる。今後は、生徒が必要性を感じながら学習に取り組めるような教材の開発に取り組んでいきたい。